

すいそうすいそうすいそうすいそうすい

隨想



青い鼻汁のT君

橋本恵子

すいそうすいそうすいそうすいそうすい

今日もまた、バスを降りた十一名の園児の中に、青い鼻汁を口までたらしよだれはもう園服をぬらし、ズボンはずれて、それを靴で踏んでいる男の子がいる。

当番になりたいのに順番がこないと

言つては、悲しそうに泣く。

「先生、さわやかな風だね」

「あの人美人だな」

ビルの看板を見ていたこんな言葉を発

して、私をハッとする。仲間はこう

言う。

「どうしてT君は赤ちゃんなのに幼

稚園にくるの?」

身長九十七センチメートルのT君も、

やはり満五歳を過ぎた年長組の年令に

達している幼稚なのである。

つい先日、私は父の目の手術のため

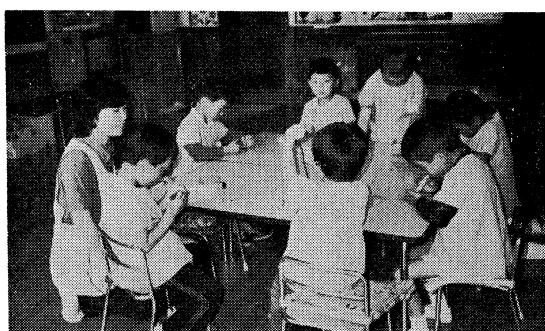
「ひざをついた保育」という言葉に
あこがれた若い日々のことなど、すっ

かり忘れてしまったのではないのかと反省する。子供を椅子に座らせ、自分が床にひざをつくと話しやすい体型になる…。それがいつの間にか、子供と逆の視線で毎日の保育を進めていることに気づく。ひざをつければ、子供の目の高さと同じ視界で物を見ることができる。真ひざをつけば、子供の心の中から同じ視界に接することができる。

十年前も十年後も心の中は変わらない。病院を訪れた。父の前に二人の子供の手術が行われた。一見なんでもなさそうなこの女の子が、タンカに乗せられて、「お母さん、お母さん」と泣き声をあげながらエレベーターの中に消えた時、母と二人で涙をぬぐつた。私も同年令の子を持つ親である。そして、T君もまた、健康な人間の人なのであると、

「あの子はまだ、健康な人間の一歳である」と、T君もまた、健康な人間の一歳である。健康であると、つい健康であることのありがたさを忘れがちである。保育も年を重ねるにつれ、慣れでその日を送ってしまい、なにか刺激がないと、マンネリ化した保育内容で、その日を送ってしまうことを反省する。

「ひざをついた保育」という言葉にあこがれた若い日々のことなど、すっ



子供の心と目で

かり忘れていたわけではない。短大を出たばかりで、新設の園で、先生は自分一人だけなのである。技術不足に悩みながら心と心のぶつけ合いの毎日であった。あの時の子も、今は高校生となって、ときには我が家に足を運んでくれる。真的保育は絵が上手に描けることではない。ピアノが上手に弾けることではない。心と心をぶつけ合って心を育てることではないかと思われる。

現代は、コンピューター時代を迎え私たちの生活も、ボタン一つで、頭や体を使わずに済むことが多くなってきました。何年か先、むずかしい計算の教育など必要なくなるのではないかと思うと、教育という立場に立っている自分の身が、教育の内容の変化にせまられるのは、必至と思われる。

私たちに要求されるもの、いつまで

たつても変わらぬ内容、それは心と体

の健康な子供を育てることであろう。

今日もまた、
「鼻汁をかむんだよ」
「またでたね」
「どうしてT君のズボンは下がつちやうのかな」
「ゆるいんでしょう」

一人前の返事をしながら、ズボンを上げてもらうこの子らと共に、心と心のかよった保育の道をめざしてがんばっていきたいと思う。

(船引町立堀越幼稚園教諭)